
全力少女と災難体質

アルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全力少女と災難体質

【Nコード】

N2331BA

【作者名】

アルト

【あらすじ】

「あなたの願いはなんですか？」

高校三年生の主人公朝宮悠希は夢に破れ傷ついた心を癒すために懐かしい故郷である御影町へと帰ってきた。しかし、とある一人の少女との出会が災難に巻き込まれる原因となる。

少女の名前は咲山梨花。悠希が通うことになる御影高校ではその名を知らないものはいないとまで言われる天才にして天災、ついたあだ名が全力少女というまるで台風のような少女だった。

ひょんなことから悠希は梨花に付回されることになるのだが、次第にその距離を縮めていくことによって彼女の秘密を知ることになる。そして、彼女の秘密を知った悠希はとある決断をする……
願いの叶う町、御影町を舞台に高校三年生の主人公が高校生活という小さな世界の中で苦悩し時には友人達と衝突しながらも必死に生きようとする再生ラブストーリー！。

プロローグ

「あなたの願いはなんですか？」

願い、それは人が思うこうあって欲しいと思う事柄、変化、または願望。

人の願いなど、人の数だけあり、またその内容も千差万別だ。お金持ちになりたい、人より優れた人物になりたい、といったわかりやすい欲望ともとれるものや、昔別れた両親に会いたい、あの人との恋を实らせたい、などの叶にくい願いなど様々だ。

ただ、この世界はそんな全ての願いが叶うようには出来ていない。叶う人は叶うし、叶わないものはいくら願っても叶わない。そんな理不尽な世界。

しかし、願いの叶った人全てが幸せかというとそうでもなかったりする。本当に理不尽な世界だ。

願いを叶えるためには、対価が必要になってくる。もちろん、その願いが大きければ大きいほど必要な対価もそれに見合った大きなものになる。

だが、対価を払っても叶わない願いもある。星の数ほどもあるのだ。それでも、人は願うことをやめようとは決してしない。願うことは人にとっては、生きるための希望でもあるのだ。

この世界は、とてもとても理不尽な世界、それでも人は願うことを諦めない。

……………願いの先にあるものを信じて。

プロローグ

「あなたの願いはなんですか？」

落ちゆく世界の中で彼が聞いたのはその声だった。

妙な浮遊感と急激な重力、それらを一身に感じながら彼は屋上から飛び降りた。いや、飛び降りたというのは正しい表現ではない。その証拠に、少年の胸元にはすでに気を失っている少女の姿があった。彼は屋上から落ちた少女を助けるために共に屋上から飛び降りたのだ。

そんな中で聞こえた声、しかし、その声はすでに気を失っている少女のものではない。

けれど、直接頭に響いてくる声、

なんだこんなときに?! と思いつつも声は再び頭の中に響いてくる。

「あなたの願いはなんですか？」

長い間空中に漂っているせいで、方向感覚までもがわからなくなってくる。現実かそれとも幻かわからないがその姿は確かにそこにあった。

「朝宮悠希、あなたの願いはなんですか？」

上下逆転した姿でその者は問う。同じように落ちている。いや、そこだけ時間や空間といったものを切り取ったかのようにそれはそこにいる。それもその場に静止した状態のまま、

そのナニカが現れた瞬間、彼らの体は急激に浮遊感や重力を失い、その場にとどまろうとする。巨大な水あめの中に二人揃って放り込まれたら身動きが出来ない、そんな感覚。

落ちていくことも這い上がることも出来ない。ただ唯一、許されるのはその場にとどまることだけ。それでも、体が自由に動かせるわけではなく、せいぜい、体の体勢を整えることぐらいしか出来なかった。

彼らをわずかの間だけ生きること許したその人間かも理解し難いナニカは若い女性の姿をしていた。その姿はどこかで見たような姿をしていたが、生憎と悠希にはそんな特定の女性というものはいない。しかし、妙に懐かしい、そんな気持ちにさせる不思議な魅力

があつた。

自身が落下していることを忘れそうになる。切り取られた世界の中でも胸の中で気を失っている少女は相変わらずの様子で目を閉じたまま開くことはない。

「あなたの願いはなんですか？」

なおもしつこく問う女性性は、言葉とは反面に何故か悲しそうな表情を浮かべている。そんな彼女の言葉に悠希は考える素振りを見せるが、残念ながらこの状況でそんな余裕はない。

「僕の……、願い？」

「そう、あなたの願い」

呆けた様子で問い返す悠希に、目の前の彼女は悲しい顔を浮かべながらも彼に問う。

「思い出して、あなたがここにいる意味を」

「ここにいる意味？どういうことだ？」

彼女は悠希の問いに答えず、ただ彼と胸の中で眠る少女だけを見据えていた。そんな彼女に悠希は何も言えずにいた。ここにいる意味？そんなことを考えたことすらない。

ただ普通に生きて普通に死んでいく。僕の人生なんてそんなものだと思っていた。

そう、ただそれだけの話だったはずだ。

彼はそれ以上何も求めない。しかし、彼女は悠希にここにいる意味を求める。

「僕は……、僕は……」

なぜここにいるのだろう、わからない。

そんな漠然とした思いが胸の中にこみ上げる。屋上から落ちて自身の人生などあとわずかという中でまさか自身の意味を問われるなど想像すらしなかった。何のために生きて何のために死んでいくのか、

この世に生まれて十七年、そんなに長くは生きてはいないが世の中のことは少しはわかるつもりではいる。それでも、この小さいは

ずの世界は彼にとっては大きすぎた。自分のことすら完全には理解してはいないのに、世界の全てを知ろうということが間違いなのだ。

「う……………ん……………」

胸の中にいる少女がむずがるように声を上げる。

「……………意味か……………」

少女を見ながらふと思う。きっと僕のいる意味はこれなのだろう。もちろん、確証など無い。ただ、そう思った。

彼女は悲しい顔から優しい微笑みに変わると自身の意味を悟った悠希を褒めるように言った。その鈴のような響きを持つ声は悠希の心の中にじつくりと染み込んでいく。ぼう、と悠希の中に温かい思いが溢れる。

「僕の意味」

「そう、それがあなたの意味、そして、あなたの願い」

「僕の願い」

自身の意味を悟った時、再び世界が動き出す。ゆっくりと確実に世界は動き出し、彼らは落ちてゆく。

胸に抱えた少女は相変わらず目を開けることはない。けれど、それはどこか安らかな眠りのようにさえ見える。

薄れゆく意識の中でなぜそう思ったのかは彼自身見当もつかない。少なくとも彼が助かりたいとか自身の身の安全を保障するものではなかった。

たった一言、

落ちてゆく世界の中で彼は答えた。

その声は誰かに届いたのかはわからない。少なくとも……………、彼女には届いたはずだ。

これでいいんだ……………、これが僕のいる意味でこれが僕の願いだ。そんなことを思いながら、悠希の意識は遠退いていった。

ほんの少しだけ歪んだ日々の始まり

「う……ん……」

夢を見ていた。正直、どんな夢だったかはあまり覚えていない。

良い夢か悪い夢かと問われるならば間違いない。後者ではあるのだけれど、ただ、その夢の内容を深く吟味したならば意外にも良い夢なのかもしれない。

「まあ、どっちでもいいけどね」

そんなどうでもいい感想と、まだふわふわと浮いているような感覚に、頭を軽く振り目を覚まそうと意識を集中させる。蕩けそうになる眠気が恋しいが、いつまでも公共の場で寝顔をさらし続けるのもどうかと思い起きることにした。

「ふう……今はどの辺りだろう……」

体を動かすついでに、辺りを確認するように車内を見渡すが、残念ながらこの車内には僕一人しかない。さすがにこんなところで旅行に来る物好きはいないか。そんなことを思いながら大きく伸びをする。

うーん、と、伸びをしたときに思わず声が漏れるが、辺りを気にすることもなく思う存分に体を伸ばす。変な体勢で寝ていたせいか節々が痛い。

長いこと電車で揺られ続けたせいで、いい加減座り心地も悪かった。さすがに三時間も一人で話し相手もなく、座り続けているものもなかなか苦痛だった。そんなことを思いながら風に紛れて何処からか懐かしい潮風の匂いがする事に気づく。

「そういえば、海が近いんだっけ」

しみじみと懐かしい故郷の姿を思い出す。窓の外には青々とした海が広がっていて、小さく見える船が一つの点の様に海をのんびり走っていた。その風景は自分がいた故郷がもうすぐそこにあることを感じさせる。そんな風景を眺めていると、座り心地の悪いイスの

ことなどはすっかり忘れてしまった。

「みんな元気にしてるかな」

二年間、連絡も取っていない友人の姿を思い浮かべる。シロは元気だろうか、カズはきつと美人になっているだろうな。きつと詩音も大きくなっているよな。そういえば今年から高校生か。などと、ぼんやりと考えながら外を眺める。

「あなたの願いは何ですか？」

頭の中で響く声にふと我にかえる。この町を出るときに聞いたあの声が再び聞こえた。

ガタン、ガタンと、聞こえる単調な電車の音。今、この車両には僕しか乗っていない。だから、僕に話しかけてくる人物も残念ながない。しかし、それでも聞こえる声。誰かが僕に問いかけるようなそんな声。その声は鈴のような響きを持ちながらもどこか寂しそうな音色を持つ声。

「僕の願い……」

願い。それは何なのだろう。この町を出るときははっきりとした目的は持っていた。でも、今はどうだろうか？ そんな漠然とした事を考えていると、駅員の単調なアナウンスが目的の場所を知らせた。

「次は御影町、御影町」

ようやく着いた故郷が見えてくると、先程の疑問はいつの間にか霧のように霧散していた。

電車が完全に停車するのを待って、誰もいないホームに降りる。

当然ながら、この駅に降りる人間は僕しかいなかった。

電車のドアが閉まる音と、閉まるその様が僕の夢へと続く扉に見える、それが完全に閉じてしまったのを物語っているように見えた。

もう、終わったんだ。これで、僕の夢は完全に潰えた。

後ろを振り返らないって決めたはずなのに、未だに引きずっている。そんな気持ち嫌でこの場所に帰ってきたはずなのに……。

「もう……終わったことだ」

まるで自分に言い聞かせるように呟く。そうすることで新しい自分と出会える気がしたから。

今まで、自分を運んでくれていた電車を見送り、誰もいない改札口へと目指す。向こうにいたときは自動改札が普通だったから、こんな誰もいない改札口というか無人の駅が無性に新鮮に見えた。

少し古びたポスターと時代とともに風化した駅。潮風の匂いと気持ちばかりの春の陽気が僕を迎えてくれた。

久しぶりに帰ってきた故郷の空気を思い切り肺に吸い込む。春の香りが体中に染み渡り、振り返ると青い海と少し冷たい風が心地よかった。

「変わってないなあ」

故郷に帰ってきたの第一声がこれだ。もう少しまともな感想があるだろうと、自分自身に苦笑する。でも、本当に感動した時などは声など出ないものだ。

海沿いの駅から見える町並みは僕が去ったあとあまり変わってはいないようだった。まだ咲くには少しばかり早い桜と、その合間に沿って造られた家屋、そしてその場所に息づく人々。町は坂の傾斜に沿って造られていて、春にこの街の展望台からこの町を見渡すと桜の絨毯と青々とした海が一望できる。御影町それがこの町の名前だ。

新しい学校の転入手続きの事もあったから、まだ春休みのこの時期に帰ってきた。反対する親を説得し、最後の一年くらいはやはり心許せる友人たちと過ごしたい、そんな思いを胸に抱きながら今ここにいる。

だが、目的はそれだけではない。僕にはもう一つ叶えたい願いがあった。ただ、それは、どんなに願っても叶わないかもしれない願いだ。それでも僕は、一縷の望みを持ってこの町に帰ってきた。

「少し、考えすぎかな。僕のこの町での生活はまだ始まってすらいないんだし」

自身で思った下らない不安を一蹴すると、目の前に見える町並み

に染まるように歩き出した。

昔と変わらないはずの町は少しずつ変化を見せているようだった。当然だ。僕も成長すれば町も変わっていく。それが当たり前前の事のはずなのにひどく寂しく思えた。しかし、その中にあるものも変わらないものがあることに気づく。小さい頃によく遊んだ公園や、小銭を握り締めて通った古びた駄菓子屋、懐かしき母校、細い路地裏、そのすべてが僕がここにいた証に見え、自分の存在を証明しているかのように思える。

感傷に浸りたい思いに駆られたが、僕はそこまで人生を達観するほど長生きはしていない。まだまだ知らない事の方が多いし、これから変わったり、作られたり、失くなっていく物の方が圧倒的に多い。だから、まだ感傷には浸ってなんかいられないのだ。

小さな頃歩いた桜並木を見上げながら、自分の足跡を辿る。今はここにいる。だから、今はそれだけでいい。

ふと、立ち止まったそばから、海から吹く風に煽られ木々がなびく。まるで、僕の思いに反応しているような気分だ。

ゆっくりと目を閉じる。昔、描いた思いが僕の中に去来する。

あの子のはにかんだ笑顔、少し怒ったときに見せる頬を膨らませた子供っぽい表情、時々遠くを見つめてため息を漏らす寂しそうな表情、不意に見せる大人っぽい表情、そのどれも忘れたことは一度だってない。

あの子の顔を思い出して、懐かしい記憶に触れ自然と笑みがこぼれる。

「……僕は君に伝えるために戻ってきたんだ」

そんなことを口にした直後だった。

ビキンツと、体に電流を流されたような痛みが走る。

「な、なんで!？」

気のせいだ。本当はそう思ったかったが、体は正直なようで心臓がドクン、ドクン、と激しく脈打つのがわかる。閉じていた目を開け周囲を確認するが、残念ながら何も無い。

やはり、気のせいかな？ そう思い首を傾げながら歩こうとするが、その場から歩くことが出来ない。

「何かあるのか？」

自分に言い聞かせるように呟く。当然ながら、その問いに答えてくれる者などいない。

体中の感覚が鋭敏になっていく。体がこの反応を示すときは大抵、ろくなことには遭わない。最初はこの反応に戸惑いもあったが、さすがに慣れた。むしろ、この体のおかげでここにいることが出来ていると言っても過言ではない。

なんだ、一体何が起きる？

そんな不安とある種の期待の入り混じった感想を抱きつつ、その事態を静観する。

ふいに視線を感じ慌ててその方へと向き直る。ふわりと、黒髪を風になびかせながら一人の少女がこちらを見ていた。

「君は……」

まさか、そんなはずは……。

動悸がさらに増していくのがわかる。体の体温がそれに呼応するように高まっていく。

あの長く艶めく黒髪、二つの大きな双眸、雪のように白い肌、触れれば途端に壊れてしまいそうな華奢な体、そのいずれもが先ほど僕が思い描いていたあの子と同じ姿形をしてそこに立っていた。

一刻も早く駆け出したい。君の顔をもっと見たい。向かい合って君の声を聞きたい。

思い描いた夢と現実が重なっていく。

どれだけこの時を望んだか。

どれだけ君の事を考えていたか。

どれだけ…… どれだけか。思いを募らせても、叶わないと思っていた。だけど、君はそこにいる。だから僕は君に会いに戻ってきた。

動け、動け、強く、強く、

そんな思いと共に、より強く動けと念じる。

一步踏み出す。やっとパドックから開放された競走馬のように一目散に少女へと駆け寄る。

会えた、やっと会えた。二年間もずっとこの時を待ち望んでいた。予想以上に早い願いの成就に、少しの戸惑いを覚えつつも僕の心は最高に高まっていた。

しかし、対する少女の態度は僕の予想したものとは違い、とても冷やかなものだった。

こちらに向かってくる変質者を見るような目で顔を歪めると、僕と同じ方向を向いて走り出した。

「ちょ、ちよつと待って!!」

慌てて声をかけるが少女は一目散に逃げる。僕は逃げる少女にさらに加速度をつけて走る。側から見れば、完全に変質者が少女を追い掛け回している構図になっているものの、今の僕にそこまで考えている余裕などない。

二年間ずっと思ってきた願いが今、叶おうとしている。それだけで頭の中は一杯だった。

それにしても逃げる少女の足の速いこと速いこと。男子高校生であるはずの僕が追いつがるのに必死になっている。手を伸ばせば届く距離にあるのに、また……僕の思いは届かないのか……。

いや、届く! だから手を伸ばせ! 掴め! 僕は君に伝えたいことがたくさんあるんだ。心の中でもう一人の自分が叫ぶ。けれども目の前を走る少女はそんな僕の心中とは正反対の反応で「あんな何なの!?!」なんで私を追いかけてくるの!?!」必死になって逃げ惑っていた。

「僕は君に会いに来たんだ! ずっとずっと会いたかった!!」
自分でも明らかに変質者のような口ぶりだなにやらんでもないことを口走っている気もしないではないが、それ以上に彼女を求める思いが上回っていた。ずっと走り回っているせいで、息が上がってくる。呼吸に空気がかすれる音が混じりだす。現役でいたときはもう少し走り回ってもこの程度問題なかったのだが、やはり時の流

れは恐ろしい。格段に体力が落ちているみたいだった。

少女はなおペースを落とすことなく走っていたが、それでも、やはり僕のほうに分があった。

必死の体で彼女に追いつくと、全力で振り続けているその手を掴む。

「ちよつと待ってくれ！！ 僕は君に話が

「何すんのよ！ 離せ、この変つ態っ！」

見た目どおり華奢な感触が伝わってくるが、この体のどこにそんな力があるのだろうか少女はそう言って掴まれていないほうの腕で僕を掴み返すと、勢いもそのままに宙へと放り投げる。

突然の状況に頭が追いついていかない。

グラリ、ふわり、ドスンッ！ アクシデント三段活用な感じできれいに地面へと叩きつけられる。

一体、何が起こった？ 状況を推測しようにも頭が回らない。地面に体を打ちつけた衝撃と痛みの方が強く、考えようとすることを強制的に排除する。

「か……………は……………」

漏れ出そうとする空気を押さえ込もうとするが、衝撃に対するダメージのほうが大きくそれを許さない。体が不気味に痙攣するのがわかる。自分が投げ飛ばされたのだと気づくには時間がかかった。それ程までに僕のダメージは深刻だった。

「く……………がぁ……………な、なんで……………」

「な、なんなのよ……………あんだ……………」

なんなのだとはこっちが言いたい。もしかして覚えていないのか？ 僕の中にそんな不安がよぎる。踵を返すように少女は僕に背を向ける。その姿を見て僕は必死に引き止めようとするが、激しく体を打ちつけた衝撃のせいで言葉が出ない。

「ま、待って……………くれ、僕は……………」

かろうじて残っていた空気を総動員してかすれた声を吐き出す。 やつと……………やつと……………会えたのに。また叶わないのか？ 僕の願

いは……。

遠退く意識と戦いながら彼女をその場に留めようとするが、その声が届くはずもなく、少女はその場から立ち去り、僕は一人春の陽気の中、地面に這いつくばりながら意識を失った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2331ba/>

全力少女と災難体質

2012年1月5日22時46分発行